



芝小だより

第七月号

発行所 港区立芝小学校
 〒105-0014
 港区芝 2-21-3
[TEL:03-3456-3072](tel:03-3456-3072)
[FAX:03-3456-3071](tel:03-3456-3071)



共感―かけがえのない人々を

大切にするために

校長 齋藤幸之介

晴れた日のグラウンドは気温がかなり高くなりますが、これをものともせず、友達と笑顔いっぱい遊ぶ本校の多くの子供たちを見たとき、改めて幸せを感じます。一方、雨の日には力を持って余し気味になる子供たちは、教室等で活動を工夫しながら過ごします。最近、数名の二年生が校長室へやってきて過す場合が見られます。会議用に購入したホワイトボードはそのときだけは子供たちのキャンバスになります。限られたペンを取り合って採めごとに発展しそうにもなりますが、順番をつくらたりゆすたりしながら絵を描く姿に、子供たちのよさを感じています。

ふれあい月間と人権週間

六月には、東京都教育委員会が設定したふれあい月間を受け、平素より大切にしている子供たちの人間関係が豊かになるように取り組みました。生活アンケートで一人一人の状況を把握し、子供たちが道徳の授業や学級指導で友達と関わる意味や関わり方を学べるようにし、グループ単位で様々な活動をした学級全体で話し合ったりする場面を多く設定した

りしています。また、本校は七月第二週目の人権週間として、いじめを許さず、互いをかけがえのない存在として一層強く認識できるようにしていきます。

東京都教育委員会が掲げる人権教育の目標には「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるようになる」と記されています。私は、この目標を達成するためのキーワードの一つに「共感」があるのではないかと、思っています。他の人の大切さを認めるには、その人の思いや願い、考えなどを深く理解する必要があるからです。

共感とは

共感とは、広辞苑によれば「人の考えや主張を、自分もまったく同じように感じたり理解したりすること」であり、これを感情と知性の両方を含む全人格的な営みである、とする考え方があります。

共感とは、人間が進化によって得られたとする説もあります。人間は社会的な生き物であるので、一人一人が感じる快・不快などから社会で生活する中で相手の心を読み取る能力が生まれ、さらに言語の獲得等によってお互いに概念等を交換できるようになり、このことが共感するということに大きな影響を与えているという見方があるのです。

精神科医の成田善弘先生は、臨床場面を分析しながら、治療者が患者と向き合う際には、治療者自身の体験が大きく影響することを述べています。そして、成田先生は、治療者と患者の間にある共通の体験が成立しているときに理解をすることができるとしています。

このことを基にすると、友達の大切さを認めるには、友達の間になるための体験が必要になる、と考えることができます。いくら「相手の気持ちにならなさい」「友達のことを考えなさい」と言われても、子供たちはそれは簡単に理解できるものではありません。だから、友達と遊び、共に学習活動をし、様々な作業をする、その中で、友達に触れることを通して他の人の思いや願い、考えなどを理解する、この積み重ねが人権教育を進める上で不可欠となります。ときにうまくいかないこともあります。しかし、周囲の力を借りながらも自ら解決していくことが子供たちにとっての貴重な体験にもなります。

例えば、これからの教科等の学習には、「対話的な学び」が重視されます。これはまさしく友達と関わりながら学習活動をしていくという子供たちの姿が求められているということです。本校では、このことも踏まえつつ、子供たちが相互に関わり合う活動を随所に設定しながら体験を積めるようにし、そして自分も他の人もかけがえのない存在として大切にできるようにしていきます。

(参考文献)

福田正治著

「共感 心と心をつなぐ感情コミュニケーション」

(ハする出版)

成田善弘・氏原寛編

「共感と解釈―続・臨床の現場から―」(人文書院)

共感と体験